

<報 告>

日本統治時代の台湾生活誌 ()

柴 公 也

(12) 青春の面影

島崎義行 (1918 年生) 台中師範学校卒

私の父は、岐阜の山奥の貧農の次男でしたが、日露戦争に従軍しております。終戦後、退役したのですが、故郷に帰っても生活の目途が立たないということで、台湾の警察に志願したのだそうです。最初は、山地の先住民の駐在所に配属されたのですが、何度も生命の危機に晒されたそうです。それで、警察を辞めて台中州の雇員になったとのことでした。

私は、父の勤務に従って台中州の各地を転々としました。中でも、私の生まれ故郷の埔里は、自然が一杯の土地でした。桃源郷とは正に埔里のような所を言うのでしよう。初夏の頃になると、裏山では筍が採れて食卓を飾ってくれました。夜になると、蛍が開け放した部屋の中に飛んで来て蚊帳に何匹も止まり、楽しい夢を見させてくれました。秋になると、伴侶を求める鹿の物悲しい鳴き声が山里を一層淋しくしておりました。

家の東側には清流があって、ハヤ、エビ、ウナギなどが棲息しておりました。母と洗濯や食器洗いに行くと、川岸の洗い場の板囲いの中に、必ずと言ってよいほどエビとハヤが入っておりました。エビは簡単に捕えることが出来たので、よく天婦羅にして食べていました。

ある日、埔里から大島君が友達を連れて来たので、川の上流に向かって一緒に歩いておりました。すると、突然川の中から賑やかな人の声が聞こえて来ました。恐る恐る近付いて見ると、20 名はいたでしょうか、高砂族の男たちが素っ裸になって水浴びをしていたのです。恐ろしくなった私達は、口も利けずに飛ぶようにして逃げ帰りました。埔里小学校一年生の夏の日のことでした。子供の頃、遊び友達は台湾人が多かったので、自然と台湾語を覚え、今でも台湾に行くと、台湾語で用を足しております。

三年からは、台中市の明治小学校に移り、卒業後は台中師範学校 (* 普通科五年に演習科一年) に進みました。国語、算術、地理、歴史、理科などの筆記試験は合格し

たのですが、面接試験で落ちてしまいました。それが、後になって合格者の一人が台北工業に志望を変えたため、補欠であった私が急遽繰り上がって合格したという訳です。本当は、内地人の学校である台中二中に入りたかったのですが、授業料が掛からず寮費も官費で賄ってくれるからという、父の意向で師範学校に入学させられたのでした。

台中師範は、一学年一クラスで40人でした。内地人と台湾人の共学の学校でしたが、内地人が六割ぐらいを占めておりました。内地人の生徒の競争率は低かったのですが、台湾人の生徒の競争率はずっと厳しかったのです。台湾人の生徒は皆優秀で、公学校でトップの成績でなければ入れないと言われておりました。それだけ台中師範の入試は、台湾人にとっては不利でした。

また、台湾人は、いくら成績が優秀でも級長にはなれませんでした。私の同級生で成績トップの台湾人は一度も級長にはなれず、副級長止まりでした。ただ、私の五、六年先輩で、開校以来の秀才と謳われ、東京高等師範から東京文理大に進み、後に台湾大学の教授になった陳蔡練昌（*陳は養家の姓）氏は、例外的に級長を務めたとのことでした。

師範学校では、中学校の科目の他に、教育学や教育心理学を学びました。演習科になると、三学期に付属公学校で、二ヶ月間の教育実習がありました。最初の一ヶ月は授業参観と担任の先生の手伝いをしましたが、次の一ヶ月間は実際に教壇に立って教えておりました。授業の教案作りから採点まで一人でこなさなければならなかったので、負担は大変なものでした。それでも実習を終えると、これで教師としてやっていけるという自信が湧いてきました。

同級生同士では、仲良く付き合っていました。時に先輩に気合を入れられることもありました。また、内地の中学校を出て演習科に入ってきた内地人の生徒の中には、台湾人を馬鹿にする生徒もおりました。それで、湾生（*台湾生まれの内地人）の生徒も台湾人の生徒に加勢して、殴り合いの喧嘩をしたこともありました。

先生方は、大部分内地人でしたが、台湾語の先生他に、数学の先生のように、東京高等師範を出た台湾人の先生もおりました。先生方は、差別することなく公平に教えてくれましたが、中には台湾人を低く見ているような先生がいたことも事実です。

師範学校では全員寮生活でしたが、二十畳ぐらいの広さの部屋に、学年の違う生徒が内・台人混合で12~3人が入っておりました。ただ、先輩から殴られたり苛められたりするようなことはなく、皆仲良く過ごしておりました。床はコンクリートでしたが、部屋の片側に畳の寝台が並んでおりました。部屋には各人の椅子と机があって、9時の消灯の時間まで勉強していました。9時以後は、自習室に行くのが決まりでした。

生活は軍隊式で、規律や時間には厳格でした。起床後は全員で体操をしておりまし

た。寮の食事は三食日本式で、御飯と味噌汁と魚や野菜のおかずでしたが、お代わりは自由でした。学校には売店があって、空腹時には、そこでビーフンなどを買って食べていました。風呂は、大浴場で毎日入れましたし、洗濯は、専門の洗濯屋に依頼しておりました。半ドンの土曜日の授業が終わると、台中市内にあった自宅に帰りました。当時、娯楽と言えば映画でしたが、学校から観覧を禁止されていたので、家で骨休めをしていました。

台中師範学校では、内地人と台湾人を区別することなく、慈愛に満ちた心で子供たちを教え導いていくという精神を叩き込まれました。元々台湾生まれの私は、台湾人とは全く違和感なく付き合っておりましたから、この精神で、私は台湾人の子供たちと、自分の人生で最も充実した青春時代の毎日を過ごしていたのです。

昭和 12 年に師範学校を卒業して、平地の台湾人の学校である大里公学校に赴任しました。初任給は 45 円でした。ただし、内地人の場合は六割加俸がありましたから、72 円にもなりました。内地の小学校の先生の場合は、外地手当での加俸がなくて 45 円だけでしたから、独身だった私には充分すぎるくらい余裕がありました。ただ、45 円の本給しかもらえない台湾人の先生から見れば、差別と映って不満が大きかったろうとは思います。

また、昇進の面でも差別があり、校長や教頭にはなかなかなれませんでした。実際、私の知っている限り、校長になった台湾人の先生は一人しかおりません。

大里公学校には、内地人の先生だけではなく、台湾人の先生もおりました。また、若い女の先生も何人かいました。

私の最初の担任は一年生でした。一年から日本語を教えましたが、台湾語は使わずに直接法で教えておりました。最初は解りませんが、子供ですから一ヶ月も経つと意思の疎通が出来るようになり、一年の終わり頃には、ある程度話せるようになっていました。

大里公学校に一年勤めましたが、海軍に召集されて内地の呉の海軍基地で 4 月から 8 月まで五ヶ月間訓練を受けました。軍隊生活は厳しくて、毎日のように「海軍精神注入棒」で尻を叩かれておりました。海軍では水が貴重品ですから、風呂も十日に一度だけで、顔を洗うにもコップ一杯だけでした。ある時は、上官に水を盗んで来いと命じられ、盗みに行きましたが途中で捕まり、罰としてきつい仕事を言い渡されたこともありました。

昭和 13 年の 9 月、短期現役から帰ってみると、大里公学校から軍功公学校に転任になっておりました。軍功公学校は、台中市の北東部の平地と山間部の境目にある全校で 12 学級の小さな学校でした。ほとんどの家庭が農家で、客家系の子供もおりました。先生方は、内地人だけでなく台湾人の先生もいましたが、たいてい師範学校を出た先生方でした。

軍功公学校は田舎の学校ですから、上級学校に進学する子供はほとんどなく、私の担任した子供では、台湾人の学校である台中一中に進んだ生徒が一人いただけでした。その生徒は、後に大陸のアモイ大学に入り、終戦後台湾に戻って来て台中市の教育課長を務めました。

軍功での四ヵ年は、41年間の教職生活中、生涯忘れることのできない思い出の多い期間でした。今から考えると、授業中は別として、それ以外の時間は、到底先生と呼べる姿ではなかったような気がします。

放課後になると、毎日のように子供たちを裏山に連れて行き、罾を仕掛けて野兎や鶉を捕らえていました。また、学校の前の川に泳ぎに行き、岩の上から飛び込みを見せたり、潜ってエビを手掴みにしたりして得意になっておりました。

普段は、水量の少ない清流も、いったん台湾特有のスコールが一時間も続くと、あっという間に濁流に化してしまうのでした。そうすると、目の前の対岸から来ている邱氏雲（*当時、台湾人の女性には姓に「氏」を付けて呼んでいた）を始め、数名の子供たちは橋がないので、一キロ近くも回り道を余儀なくされました。私はその都度、大井川の川人足よろしく、パンツ一枚になって肩車で子どもたちを対岸に渡してやっておりました。

山間部の家庭訪問は、それこそ谷越え山越え、一軒訪問するのに数時間も掛かる始末でした。途中、百歩蛇や青ハブが出るのではないかと冷や冷やしながらか子供の家に着き、「こんにちは、お母さん、今日はとても暑いですね」と、台湾語で話し掛けると、とても喜んでくれ、鶏を潰して料理を作ってくれました。また、帰りには土産としてパイナップルやバナナ、時には筍を掘って来て持たせてくれたりしましたが、現金入りの封筒をもらうというようなことはありませんでした。

11月になって、北西の季節風が吹き出すと、マラリアに罹っている子供がよく熱を出しました。保健室の毛布を何枚重ねてやっても、青白い生気のない顔ががくがく震えているのを見るのは、とても堪らない気持でした。

ある日、学校から8キロ先の山奥から来ている張氏阿緞が発熱したことがありました。秋の日差しは急速に落ちて、私は困惑しました。このまま保健室に寝かせておく訳にはいかないので、誰か近くの人が来ていないかと、大坑の部落の店のあるあたりへ探しに行きました。ちょうど運よく一人、阿緞の家なら知っているという男を見付けました。

家まで送り届けてくれると言うので、すぐ学校に戻り、「近所の小父さんに頼んできたからね」と話したところ、「いや、いや、先生でなきゃ、いや」と言われ、子供の気持ちも理解できず、他人に頼もうとした自分の無責任さが恥ずかしく思われてなりませんでした。

私は腹を決めて、阿緞を背負って校門を出ました。大坑の部落の前を通り過ぎ、三

貴城に差し掛かった頃、日はとつぷりと暮れていました。暗闇の中を谷に落ちないように、崖っぶちの細い道を一步一步注意深く歩き続けました。阿緞は、山育ちの子にしては珍しく伸び伸びと発育が良く、体重が40キロ近くもありました。途中で何度も下ろしては休憩し、「もう少しだから心配するなよ」と励まし、また歩き出しました。

二時間近くも歩いたでしょうか、前方からやってくる松明の灯が見えた時は、本当に地獄で仏に会ったような思いがしました。無事家族に引き渡してUターンし、半ば走るようにして我が家に着いた時には、午後11時を回っておりました。23歳の時のことでした。

昭和19年4月に赴任した昭和国民学校には、女の子の給仕が二人おりました。幸女子公学校の卒業生で、年上の方が16歳の陳氏明珠でした。明珠は先生方から「明ちゃん」の愛称で可愛がられていました。明珠は、すらりと均勢のとれた肢体をしており、つぶらな澄んだ瞳、首まで伸ばした髪が良く合っていて、戦後のアイドル歌手の山口百恵にそっくりでした。その明珠が、いつ頃から私に好意を抱き始めたのかは判りません。

毎朝行われる職員打ち合わせの時、どういう訳か、今まで何時も一番先に五十嵐校長にお茶を注ぎに行っていた明珠が、突然私のところに先にお茶を注ぎに来たのです。一瞬、これは何かの間違いではないかと私は思いました。その日以来、明珠は毎日一番先に、私のところへお茶を持って来るようになりました。明珠がお茶を持って職員室に入って来ると、一斉に先生方の視線が彼女に注がれました。彼女は、自分に視線が集まっていることに、全く気が付かないかのようにごく自然に振舞い、私の前にお茶を注ぎに来ました。

ある日、私は湯沸し場にいた明珠に向かって、「明ちゃん、一番先に私にお茶を注ぐのは止めてくれ。校長先生に先に注ぐのが当たり前だろう」と注意しました。すると、明珠は、可愛らしい唇をちょっと尖らせて、「先生に一番先に、お茶を注いで、どうしていけないの」と、不満そうに返しました。私は、それ以上何も言えず、黙って明珠のほんのりと紅潮した顔を見詰めておりました。

昭和20年の夏、玉音放送が日本の敗戦を告げました。呆然として失意と不安の日々が流れて行きました。皇国日本の勝利を念じて来た私は、完全に打ちのめされてしまいました。そんな中にあっても、明珠は一日も休むことなく出勤してお湯を沸かし、空席の目立つ職員室のテーブルを拭いて、打ち合わせの始まるのを待っていました。

私は、終戦後もカーキ色の国民服に下駄履きという恰好で、昭和国民学校に出勤しておりました。9月に入ると、学校は中華民国政府に接收され、五十嵐校長を始め日本人教職員は、数名の留用者を残して解職されました。私は留用教員の一人として残ることになりました。留用となり出勤はしても、これから先の待ち受けている運命を

考えると、暗い気持ちにならざるを得ませんでした。

毎日の朝会は、終戦前と同じく、「整列」、「前へ並べ」、「気を付け」、「休め」と、日本語の号令が掛けられ、生徒たちは、日の丸に代わる青天白日旗を見上げながら、三民主義の歌をぎこちなく斉唱しておりました。台湾人の邱校長を始め、生徒はもちろん、誰一人として北京語を知らないのですから、なんともちぐはぐな朝会になるのは、止むを得ないことでした。授業は、算数、理科、体育だけで、午前中で授業は終了し、生徒は下校して行きました。午後になると、校舎や校庭の後片付けで時間を過ごしておりました。

今日も、授業らしい授業を受けることもなく、登校して来た十数名の子供たちは午前中に帰って行きました。私は、別に誰からも指示された訳ではありませんが、午後から宿直室の後片付けを始めておりました。突然「先生！」と、明珠の弾んだ声が聞こえて来ました。「こっちに来て」と、手招きされるまま湯沸し室に入ると、明珠は、蒸し立てのサツマ芋を皿に盛って差し出してくれました。このサツマ芋は、雨天体操場の東側の学校農園に生徒たちと一緒に植え付けておいたものでした。

「ああ、おいしい、明ちゃんありがとう」

「先生、こんな言葉知ってる」

明珠は、頬を少し紅潮させながら突然

「我愛汝、無汝我愛死」と、一語ずつ台湾語で、はっきり私に言い聞かせるように告げたのです。

「うん、初めて聞いたけど意味は解るよ。『私はあなたを愛している。もし、あなたがいなければ私は死にたい』つまり、『死ぬほどあなたを愛している』と言うのだろう」

「我愛汝、無汝我愛死」と、私は台湾語で繰り返してみせました。

「先生の台湾語は台湾人と変わらないわね。どうしてそんなに上手なの」

「うん、生まれた所が埔里だし、小学校二年生の時も、台湾人の家に間借りしていて、台湾人の子供とばかり遊んでいたから」

「そうなの、先生、これからどうするの。日本に帰るの」

「さあ、どうなるか……、自分でも判らないよ。第一、日本には帰る所もないし」

「それなら先生、帰らなくてもいいでしょ。台湾語上手だから、このまま台湾に残ったら」

実際、その頃の私には、この先どうなるのか、判然とした見通しは全くありませんでした。数日後、私は明珠を誘って映画を見に行きました。明珠は薄化粧をし、唇には紅が引かれていました。素颜でも色白で綺麗なのに、化粧して来たその顔は少女のそれではなく、大人の美しさを漂わせて魅惑的でした。

映画館には、日本人の観客は、ほとんど見当たりませんでした。台湾人に報復され

た話があちこちから伝わり、夜間に外出する日本人はおりませんでした。私と明珠は、一番後の高い座席に腰を下しました。どんな映画だったのか、ほとんど記憶に残っていませんが、覚えているのは、周囲の台湾人の視線が、みんな私と明珠に向けられていたということです。

「何で、こんな台湾人の美少女が敗戦国の日本人の青年と一緒に映画を見に来ているのだろう……」と思っているのに違いないと思いながら、スクリーンに眼を向けておりました。

映画が終わりそうになった時、私は明珠に「出よう」と声を掛け、静かに、そして足早に映画館を出ました。秋の夜風がひんやりと流れ、星が美しく煌めいておりました。いつの間にか、私は明珠の手を握っていたのです。柳川の橋を渡ると、明珠の家はもう直ぐでした。私は、明珠の家がもっと遠ければいいのにと、真っ直ぐ来てしまったことを後悔しました。このまま別れるのは惜しい気がしましたが、今の自分には全く将来の展望がないし、明珠は、まだ16歳の少女なのです。

たとえ、結ばれて日本に連れて行ったとしても、誰も身寄りのない明珠が気候や習慣の違う日本で幸せに暮らせるはずはないと自分に言い聞かせました。愛してはいけないのだと燃えかかる胸のときめきにブレーキを掛け、「さよなら、お休み」と囁いて、そのまま家へ帰ったのでした。

昭和21年の春、突然の引揚げで明珠と別れの言葉を交わすこともなく、日本に帰国させられました。台湾から遠く離れた母の故郷の北国の仙台に住むことになり、いつの間にか卒寿を過ぎてしまいました。それでも、明珠のことは一日も忘れたことはなく、いまだに明珠の姿を追い続けているのです。

引揚げ後、台湾に四回行きましたが、その度に明珠の消息を尋ね回りました。だが、誰も明珠を知る人はおりませんでした。澄み切った青空に南風の吹く日、遙か台湾の方角に顔を向けて眼を閉じると、少女のままの明珠の可憐な面影が幻のように浮かび、「我愛汝、無汝我愛死」と、優しい声が切なく聞こえてくるのです。

(13) 素封家の娘

楊劉秀華 (1921年生) 台南第一高女；日本女子大卒

私は、1921年に「和源」と号する台南の裕福な不動産屋の五女として生まれました。祖父は、1850年頃に福建省南部の漳州から渡って来たのだそうです。父は、若い時から商売を始めたので、公学校はもちろん書房にも通っておりません。

父は、長老教会の信者だったので、教会に通い、ローマ字の聖書も読んでいました。それで、ローマ字を覚え、台湾語の手紙も漢字ではなく、ローマ字で書いておりました。ローマ字の解らない人に出す場合には、漢字に翻訳する人がいて、その人が代わ

りに漢字で手紙を書いていた。商売の帳簿もローマ字で記入していました。漢族の金持ちの常として妻は三人おりましたが、私の実母も同じ長老教会の信者で、漢字ではなくローマ字を使っていました。

両親とも日本語は全然駄目でした。家には、漢字を読めるおばあさんがいて、その人が物語を台湾語で読んで聞かせてくれました。母は、それを覚えていて、よく私に話して聞かせてくれました。家が裕福だったので、そんなことをする時間のゆとりがあったのです。

私の家には、小作人の女の子がたくさん引き取られて来ておりました。当時、貧しい小作人は娘を育てられなかったので、金持ちに売り渡したり、質に入れたりしていたのです。ただ、女の子たちは、私の家に来ると幸せに暮らせるのです。食べ物と着る物は全部世話してもらえ、色々と家事を覚えて花嫁修業もできたのです。一生家で働いて女中頭になったりする者もいましたが、何年間か働いて嫁に行く者もありました。

子供の頃、私は売られて来た何人もの女の子が寝ている女中部屋に入り込んで、よくおしゃべりをしていました。また、編み物をしたりして遊んだ楽しい思い出もあります。女の子たちは、部屋の掃除をしたり、私の面倒を見てくれたり、本当に良くしてくれました。母が給料をあげていたのか、お小遣いをあげていたのか、子供でしたから判りませんが、今思うと遠い夢のような時代でした。

兄も姉も内地に留学していたので、日本語は流暢ですが、家では皆台湾語で話しておりました。私の家は、一棟一棟が独立していて大変広く、家の中だけでも充分遊ぶことが出来たのです。それで、よく友達が遊びに来て、庭の竜眼などの果物を取って食べていました。学校では日本語、家では台湾語、どちらも別に難しいことはなく、自然だったのです。

小学校に入る前に、何ヶ月か廟に開設されていた台湾人の幼稚園に通いましたが、途中で嫌になって辞めてしまいました。1928年に、台湾人の学校である台南師範学校の附属公学校に入学しましたが、同級生に16歳になる道教の坊さんの娘がおりました。

二年に上がる際に、慶応大学を出た三番目の兄に連れられて、内地人の学校である花園尋常高等小学校の転入試験を受けました。その際、消しゴムを忘れて行ったので、隣の男の子に借りた思い出がありますが、どんな問題だったのか覚えておりません。幸い、試験には合格して花園小学校に入学しました。

公学校一年生の時の成績は全部甲でしたが、小学校に転校したら、言葉のハンディのない算術と唱歌を除いて全部乙に下がってしまいました。

二年生の時と三年生の時の担任は女の先生でしたが、四年から六年までは男の中山先生でした。中山先生は、教え方は上手でしたが、厳しくてヒステリックなところが

ありました。内地人でも、台湾人でも、とにかく殴る、蹴るのスパルタ教育でした。

中山先生は軍国主義的で、長い棒をいつも持っており、ちょっと余所見をただけでも、頭をバンと叩かれました。ある時、教会のバザーの券を学校で皆に売っていたら、「お前は台湾人だから、こんな卑しいことをするんだろう」と、平手でこっぴどく叩かれたことがありました。先生に叩かれたことは怖くて、親には言えませんでした。

台南高等工業学校が設立されて、東京から赴任して来た教授の娘が、何が悪かったのか、ひどく叱られて頬を何度も叩かれました。そのうえ脚まで蹴られ、「先生、ごめんなさい」と言って、その場で失禁してしまったほどでした。

そんな厳しい先生でしたが、進学の指導はしっかりしてくれました。台南第一高女の受験を控えた六年生のある日、職員室に呼ばれ、「おい劉、お前は台湾人だから、一所懸命勉強しないと駄目だぞ」と、励ましてくれたことを今でも覚えています。中山先生は学年が上がるにつれて段々甲を増やしてくれ、卒業の時には優等賞をもらうことができました。

小学校では、弁当を持って行くと、他の内地人の子の持って来る弁当のおかずとは違っていました。内地人の級友は別に何も言いませんでしたが、子供心にも気になって、母に内地人と同じおかずを作ってくれとせがみました。近所に購買部というのがある、内地から取り寄せたおかずが売られていましたので、母に鱈子や筋子とかを買って来てと、ねだったような気がします。ちなみに、家の料理などはアモイ系でした。

小学校の時、父兄会のある日が苦痛でした。父兄会が苦になったのは、母が纏足をしていたので、ちょこちょこ歩く姿を級友たちに見られるのが恥ずかしかったからです。それで、母に代わって、慶応大学を卒業した兄が父兄会に来てくれていました。ただ、台湾人だからという理由で級友たちに差別されたことはありません。

同級生の中で、台湾人は私の他に呉英姿と劉惠露の二人しかいませんでした。呉英姿さんは医者の娘で、劉惠露さんは台南州の官吏の娘でした。劉惠露さんは官吏の娘でしたから、大変日本びいきで、「私の名前は劉惠露だけど、露子と呼んで」と言うので、皆に「露子」と呼ばれておりました。

ただ、四年生のある日、こんなことがありました。その「露子」さんが内地人の同級生と言い争いをしたことがありました。すると、「あなた台湾人でしょ。劉惠露のくせに、何が露子さんですか」と、嫌味を言われたのです。その時、私は、「ああ、劉秀華のままで良かった。秀子でも華子でもなくて」と思いました。私は終戦まで改姓名をせず、「劉秀華」で通しましたが、このことは今でも忘れられません。

1934年の4月に、花園尋常高等小学校を卒業して内地人の学校である台南第一高等女学校に入学しました。一学年は100人で、50人ずつの二クラス編成でした。

女学校の同級生とは、何の隔てもなく自然に溶け込んでいましたから、皆仲が良くて親しく付き合っておりました。互いにニックネームで呼び合っていました。私は、「しゅうべえ」と呼ばれていました。

担任の国分先生は、台湾人に対して大変思いやりのある先生でした。国分先生だけではなく、他の先生も概して理解のある先生方でした。東北大学を出た大内先生は、数学の先生でしたが、今でも「優しくて良い先生だったなあ」と思い返しております。先生は、戦後日本に戻って女学校の先生になったそうですが、その息子や娘が優秀で、外交官になったとのことでした。

一方、体操の先生は、よく台湾人を馬鹿にしておりました。学校は広くてマンゴーの木があったのですが、実が熟れても誰も取らずに落ちるに任せていました。それを隣の師範学校の付属公学校の男の生徒が取りに来るのですが、体操の先生は捕まえて引っぱたいてやろうとして、真っ赤になって追いかけるのです。すると、子供たちは真っ青になって蜘蛛の子を散らすように逃げておりました。

また、私の体操の成績が良くても、わざと低い点数に下げたのです。もう一人台湾人の医者の娘がおりましたが、医者の世話になる場合もあるので、体操の点数を良くしてやるのです。クラスに三人の台湾人がおりましたが、一人は父親の高雄への転勤でいなくなり、医者の子と二人だけになってしまいました。

上級の四年生には、台湾人が十数人いたのですが、台湾人同士で固まって台湾服を着たりするので問題になり、私たちの頃には三人だけになってしまいました。私たちの次からは五人ぐらい入学していたようです。

卒業の時、私は成績が三番だったので、優等賞をもらえるはずでした。ところが、蓋を開けて見たら、私は五番に変えられていて、皆勤賞しかもらえませんでした。悔しくて悲しかったのですが、涙を堪えて皆勤賞を細かく裂き、机の上に置いて、そのまま謝恩会にも出ずに帰って来てしまいました。18歳にもなっていたのに、家のオランダ製の大きな鏡の前で、大声でワーワーと泣いたことが今でも忘れられません。

それでも、私の次の学年には、台湾人が一番だったのですが、卒業の時、ちゃんと優等賞をもらったそうです。私が反抗して謝恩会に行かなかったのが効いたのか、優等賞を上げたみたいです。

今では、そんな風に差別されたことは、他人の痛みに対する思いやりの心が養われて、人間形成にとっては良いことだったと思っております。ただ、辛かったのは、成績を認めてもらえなかったことでした。級友たちの間では言葉も同じだし、内地人や台湾人の違いが全然ありませんでした。逆に、違いがないと思っていた時に差別されたので、本当に嫌でした。小学校の時は、気が付かなかったのですが、女学校へ入ってから、そういう差別を感じるようになったのです。

1938年の4月、日本女子大学の家政学部に入りました。女子大時代は、私の人

生で最も楽しい時代でした。寮に入ったのですが、同じ寮生で二つ年上の今泉和子さんには、大変世話になりました。一部屋に四人ずつで、各部屋の最上級生は「ママさん」、一年生は「ベビー」と呼ばれておりました。

部屋割の時、内地人の上級生は、生活習慣が違うので、朝鮮人や台湾人、あるいは満洲・蒙古・支那などから来た学生を敬遠しがちでした。自分の好みの後輩と一緒になるのを望むのですが、幸い私はどの上級生にも歓迎されました。

女子大時代にキリスト教に入信し、聖書研究会に参加して、東大や早稲田、津田塾、東京女子大、東京女高師の学生たちとも付き合いようになりました。寮では、賛美歌を歌い、読書をし、人生を語り合いました。皆裕福な家の娘でしたので、美味しい料理を食べ歩いたりして充実した毎日を送っておりました。

台湾人が内地へ渡る時、渡航証明書は必要ありませんでした。基隆を出港する際に、台湾人だけが特別に調べられるということもありませんでした。当時、台湾と内地では、時差が一時間ありましたが、大東亜戦争が始まってからは時差がなくなっていました。台湾から内地へ出稼ぎに行く人は、ほとんどおりませんでした。労働者の多かった朝鮮とは違って、台湾はほとんどが留学生でした。台湾は、宝島と呼ばれていたくらい豊かな島でしたから、内地に出稼ぎに行く必要はなかったのです。

1941年の12月に、三ヶ月繰り上げて日本女子大を卒業しました。卒業後、1942年の1月から43年の3月まで、東洋英和女学院の寮の副舎監として勤務しておりました。給料は、確か70円でした。

その頃、聖書研究会の東大の医学部の学生が訪ねて来て、いきなりプロポーズされました。余りにも突然だったので、自分は内地人とは結婚しないことにしているという理由で断りました。その時、涙が溢れ出てきたのですが、自分でもどうして泣いたのか解りません。内地人から差別を受けていたし、生活習慣も違うから内地人とは結婚出来ないと考えていたのです。その人は、聖書研究会の先生に断らずに寮に行ってプロポーズしたからといって先生に怒られ、気の毒にも平謝りに謝っておりました。

その人とは違うのですが、文通していた人がいました。やはり聖書研究会の人でしたが、特別好きというのではなく、文章が素晴らしかったので一所懸命に返事を書いておりました。ただ、その人は後にシベリアに行ってしまい、それ以来音信不通になってしまいました。

私は、内地人とは結婚しませんでした。慶応へ留学していた兄は内地人と結婚しました。兄はハンサムでしたから、青山学院の英語科にいた兄嫁が夢中になったのです。ただ、兄は甘やかされて育ったので我儘で短気でしたから、兄嫁は苦労したと思います。

兄嫁の両親は、兄との結婚に反対しませんでした。私の家の方がずっと裕福でしたので、兄嫁の両親は喜んでおりました。結婚式は帝国ホテルで挙げました。家の父も

開明的な人で、長男が内地人と結婚することに全然反対しませんでした。むしろ喜んで、兄夫婦が帰って来るまでに、敷地内に二階建ての家を造って住ませたのです。最初の頃は、女中が母屋から二階の部屋へと食事を運んでおりました。

私は、1943年の3月に台湾に戻り、翌年の3月に、東大を出て台北州の商工課に勤めていた主人と結婚しました。台湾人には、給料に外地手当での加俸がないという差別がありましたが、終戦の半年前から台湾人にも加俸が付くようになりました。それでも、もう買う物がなくなっていたので、たいして有難いとは思いませんでした。

私は、内地から遠い台湾に渡って来るのだから、内地人は給料が高いのだと思っておりました。台湾人も満洲へ行くと、内地人と同じく日本人として扱われましたから、加俸が付きました。ですから、沢山の台湾人が満洲に渡りました。ただ、台湾で生まれ育った内地人にも加俸を付けてしまったので、最初の加俸の意義がなくなっていました。内地人は、女中も雇っていたし、皆裕福な生活をしていたのです。

差別は給料だけではなく、職業でもありました。台湾人も教育を受け、優秀な人も増えて来たのに、官吏にはなかなか出来ませんでした。台湾人には弁護士とか医者などの自由業しかありませんでした。それで、台湾人は国を治める訓練が出来ておらず、終戦後の一連の悲劇に繋がったのでしょうか。あの頃、台湾人も少し目覚めてきて、自治をさせてくれという自治運動がありましたが、軍国主義が強まるとともに挫折してしまいました。

台湾にいる内地人は、善良な人もいましたが、台湾人を馬鹿にするような人もおりました。台湾にいと、なんとなく圧力を感じるのですが、内地に行くと、そういう圧力が全然感じられないのです。

当時、私は日本に対して反感を持っておりました。差別された時、どうして差別されなければいけないのかと反発していました。内地では、内地人の優越感というものを全然感じませんでしたが、台湾にいる内地人からはどうしても台湾人に対する優越感を感じてしまうのです。

日本女子大の寮で過ごしていた頃は、本当に楽しい時代でした。私にとっては、何よりも内地で素晴らしい教育が受けられ、それが一生の財産になったことに対して、この歳になるまで感謝しております。

(14) 女高師に学んで

石野多美子(1922年生)台北第一高女;東京女高師卒

私は、台北の龍口町で生まれました。小学校は、台北第一師範の付属小学校に入りました。先生は、皆内地人でした。クラスは二つありましたが、私の入ったクラスは男女が一緒でした。ただ、五年になると男女が別のクラスになりました。もう一つ

は、一・二年、三・四年、五・六年が、それぞれ一つのクラスになっている複式のクラスでした。五・六年は裁縫や手芸がりましたが、料理はありませんでした。

付属小学校を卒業して、第一高女を受験しました。筆記試験は、国語、算術、修身でしたが、他に体力検査として60メートル走や懸垂などがありました。また、口頭試問もあり、校長先生を始め五～六人の先生が並んでいる前に直立不動で臨み、質問に答えました。

幸い、合格し無事入学することが出来ました。第一高女は一学年四クラスで、一クラス50人でした。一クラスに、二～三人台湾人の級友がおりましたが、喧嘩したり苛めたりすることは一切ありませんでした。ただ、内地人の級友の中には台湾人の級友とは付き合いおとしない人もおりました。

第一高女を卒業して、東京女子高等師範学校 (* 現在のお茶の水女子大学の前身) に入りました。私のクラスからは、三人が女高師に進みました。女高師には、台湾人や朝鮮人だけではなく、中国や満洲の支那人もおりました。女高師は、文科、理科、家事科、体育科の四科に分かれていましたが、私は体育科に入りました。

私は、第一高女ではバスケットと短距離の選手で、100メートルは13秒台でした。ただし、女高師では体育の理論的な面を学ぶので、実際に陸上部で走るということはありませんでした。体育医学の専門書は皆ドイツ語でしたので、専門の科目以外では国語とドイツ語を勉強しました。

女高師を卒業すると、女学校の寮の舎監を任されるので、一、二年生は全員寮に入ることになっておりました。部屋には、一年から四年までそれぞれの学年の人が入り、四年生が室長を務めました。寮では、苛めなどは一切ありませんでしたが、時間や規律が厳しく、軍隊と同じような生活でした。学校から帰ると、お風呂に入って食事をし、消灯時間の10時までひたすら勉強するだけの毎日でした。ただ、たまには上級生に誘われて、日曜日に映画や食事に出掛けることもありましたが、平日は外出できませんでした。

女高師は、授業料が免除されておりました。それでも、教科書代や参考書代などが結構掛かりましたので、毎月50円ずつ仕送りしてもらっていました。教育実習は、付属の女学校で、一ヶ月ずつ二回に分けて合計二ヶ月行いました。

女高師の場合、二年間の義務年限があって、卒業後必ず女学校が女子師範に二年間勤めることになっておりました。卒業時には、一人に対して20校ぐらいの申し込みがありました。特に、体育は戦争で男子教員が召集されていたこともあって、引っ張りだこでした。

昭和17年に半年繰り上げて卒業し、終戦までの三年半、台北第四高女で体育の教師として勤務しました。初任給は70円でした。四高女は、一学年四クラスで、一クラスに4～5人の台湾人の生徒がおりました。教える時は、内地人や台湾人の区別な

く教えていました。もう70年にもなりますが、今でも台湾の教え子から便りが来ます。

戦争が激しくなるにつれ、正常な授業が出来なくなり、学校の中で雲母剥ぎや軍人の肩章の刺繍などをしていました。他にも、救急法というのがあって看護の勉強もしておりました。

昭和18年頃から、先生も生徒も服装がスカートからモンペに変わってしまいました。昭和19年からは疎開が始まり、20年に入ると生徒がいなくなって、授業が出来なくなってしまいました。私は疎開できず、そのまま台北の学校に残って雲母剥ぎなどをしておりました。

終戦後、学校が再開されましたが、第四高女に第一高女の日本人が合流して授業が始まりました。台湾人の場合、第一高女に第二高女と第四高女の台湾人が合流しています。日本人の学校であった第二高女と台湾人の学校であった第三高女は単独で授業を始めました。

第四高女には、蒋介石の重慶政府から来た人が女子師範と兼務して校長となりました。週一回朝礼がありましたが、その度に拙くて品のない日本語で演説をしていましたので、生徒たちはクスクスと笑っておりました。

日本人と台湾人は完全に分かれてしまったのですが、台湾人の生徒の中には北京語では解らないと言って、わざわざ四高女に来て、廊下で日本語による授業を聞いている者もいました。当時は、まだ日本人が実務を担当していて融通が利きましたから、お咎めはありませんでしたが、今となっては懐かしい思い出です。

(15) 赤貧の中で

王 海清 (1924年生) 埔里南公学校卒

私は、1924年に台中州の彰化の貧農の五人兄弟の次男として生を享けました。その後、新高郡の魚池庄に移りました。家は貧しく、掘っ立て小屋のようなあばら家に七人が寝起きしておりました。父は、田畑を借金のかたに取られてしまい、他人の農地で日雇い仕事をする他ありませんでした。母は、私が4歳の時に、31歳で病死しておりました。

父は、その後離縁された三人の子連れ的女性と再婚しましたが、その女性もあまりの貧しさに呆れたのか、直ぐ逃げて行ったそうです。それでも懲りずに、金貸しの紹介で埔里から二番目の後妻を迎えました。継母も、離縁された女性で連れ子が一人おりました。父の再婚を切っ掛けに、上の姉は遠くの街へ女中勤めに出て行ってしまいました。

継母は厳しい人で、私が7歳になると、「お前も一人前になったのだから、しっか

り働くように」と言い渡したのでした。私は雇い主の求めに応じて、夜の明けぬうちから、牛の世話、草刈り、籾殻干しなど休みなく働き続けました。

8歳になる頃、私も学校に行きたいと思って、両親に学校に行かせてくれと頼みました。最初は「百姓に学問はいらない」と取り合ってくれなかったのですが、「ちゃんと仕事はするから行かせてくれ」と何度も頼むと、継母は「来年になったら行かせてやる。それまではきちんと仕事をするんだよ」と言ってくれたのでした。

しかし、一年経っても二年経っても学校へは行かせてくれませんでした。11歳になったある春の日、田んぼで農作業をしていると、余所行きの子息の息子を連れ親戚の小父さんが通り掛かりました。公学校に息子の入学手続きに行くところだったので、私は田んぼを飛び出して、小父さんに自分も公学校に行きたいから連れて行ってくれと頼みました。熱意が通じたのか、魚池の公学校に連れて行ってくれました。

学校で、小父さんが保証人となって入学手続きを始めたのですが、教頭先生が親の判が必要だと言うので家に帰り、親に内緒で印鑑を持ち出して判をついたのです。入学手数料の二十銭は、小父さんに借りて出してもらいました。

両親は猛反対でしたが、小父さんと近所の人たちが何とか説得してくれ、結局今まで以上に仕事をするという厳しい条件付で入学を許してくれました。私は11歳で入学しましたが、中には13歳で入学した者もありました。ちなみに、きょうだいの中で公学校に入ったのは私一人だけでしたが、私の人生に大きな希望の光を灯してくれたのです。

魚池公学校へ入学した翌年、遠縁の農家が父を作男として雇ってくれることになり、埔里へ引越して埔里南公学校に転校しました。南公学校は、一学年5クラスで、一クラスは50~60人でした。男の子のクラスが4クラスで、女の子は少なく、一クラスだけでした。埔里は、田舎の魚池とは違って街でしたから、子供たちはきちんとした身なりでズックや下駄を履いており、継ぎはぎだらけの服を着て裸足で通うのは私ぐらいでした。

先生方は厳しくて、ふざけたりいたずらをしたりすると、ビンタや鞭で叩かれました。私は優等生でしたから叩かれたことはありませんでした。

私は、学校から帰ると直ぐ仕事を片付けて、遊ぶことなくランプの下でひたすら勉強に専心しておりました。しかし、理解のない継母は、灯油がもったいないという理由で私のランプを取り上げてしまったのです。それで、仕方なく夜明けとともに教科書を広げ、木の枝を鉛筆代わりにして地面をノートにし、算術の練習をしていました。

私なりに一所懸命に勉強したのですが、それでも埔里南公学校では成績が四番に下がってしまいました。自分の名前が書けるようになったのだから、もう充分だと常々言っていた継母は、「一番になれないのだったら学校をやめたらいい。勉強をしたいと言うけど、本当は仕事をサボりたいだけなんだろう」と冷たく責め立てるのでした。

私は、継母を見返してやると必死になって勉強をしましたが、その甲斐あって四年の二学期には一番になり優等賞をもらいました。普通は、クラスで一番の生徒が級長になるのですが、級長にするには私の身なりがあまりにもみすぼらしく、私の家の窮状を知っていた内地人の校長の計らいで、私に余計な負担を掛けないようにと副級長にしてくれたのでした。

担任の先生は、私に中学校への進学を勧めてくれたのですが、私の家の経済状況からは、高等科への進学も叶いませんでした。同級生の中で、中等学校に進んだ者は、5~6人しかおりませんでした。それも、農業学校や商業学校が主で、名門の台中一中に入った者は1~2名だけでした。

1941年、私は埔里南公学校を卒業して、台中州の林業試験場埔里分場の種苗課に就職しました。初任給は27円でした。子どもの頃から農作業に従事していたので、種苗課の仕事は私に合っていて、内地人の上司から梨、桃、林檎などの果物と杉、楓、檜などの育種技術をみっちりと仕込まれました。

南公学校の校長が埔里の街長になると、校長の伝手で水里坑役場に入り、造林の仕事に従事するようになりました。給料は高等科卒業者と同じ33円で、二十歳前の若者としては高給取りでした。人並みの生活が出来るようになったので、知人の紹介で公学校卒の女性と結婚しました。

この頃になると、赤い襷を掛けた台湾人の軍属が盛大な見送りを受けて出征していくようになりました。台湾人もいずれ徴兵されるのだろうし、また給料も良く、戦争が終わったら海外で仕事出来るのではないかという現実的な理由から、私は1944年に海軍の陸戦隊に志願兵として入隊しました。結婚して一年にもなりませんでしたが、別にお国のためにということではなかったのです。両親は反対しませんでした。妻は強く反対しておりました。役場からは、毎月12円が留守宅の両親に支払われていました。

高雄の近郊の左營の陸戦隊では、食料の仕入れを担当しました。新兵の頃、私の班で紛失事件がありました。その連帯責任を問われて、班全員が一行に並べられ、上等兵に「改心棒」で尻をこっぴどく叩かれたことがありました。軍隊の生活は猛烈に厳しかったのですが、中隊長が優しくしたので何も辛いことはありませんでした。私は同期生の倍も働いたので、中隊長に目を掛けられ、半年後、士官の給仕に抜擢されました。

一度、前から海外に出てみたかったので、無謀にも米軍の魚雷艇が出没する航路の輸送船の乗務を志願したことがありました。自分はいつでも死ぬ覚悟があると決意を述べたのですが、上官が無謀なことは止めて自分の任務を全うするようにと諭され、海外勤務の夢は潰えてしまいました。それでも、一年二ヶ月余りの厳しい海軍生活で、どんな苦難にも負けない精神力が養われ、その後の人生に大いにプラスになりました。

その点では大変感謝しております。除隊時には、一年二ヶ月分の給与の700円をまとめて支給されました。

終戦時、私は上等兵になっておりました。敗戦の報に接した時は、海外飛躍の夢が破れて実に残念でしたが、また一方で、これで生きて家に帰れると嬉しかったのも事実でした。

終戦後は、元の役場に臨時雇いとして戻ることが出来ましたが、外省人(*終戦後、大陸から渡って来た漢族)が管理職を独占していて、職場の雰囲気は全く変わってしまっていました。外省人たちは、林業や山の植生を知らず、材木商と結託して収賄に明け暮れておりました。業者が森林保護区の樹木を伐採しようが何しようが見て見ぬ振りをして、私腹を肥やしていたのです。私は、北京語が出来ませんでしたし、融通の利かぬ奴と冷遇されたので、役場を辞めてしまいました。

その後、引き揚げて行く日本人の家財の売買の仲介で、多少の財を成した後、霧社の砂金取り相手の商売を始めることにしました。商売が軌道に乗り、さらに工具屋、雑貨屋、食料品店と事業を広げました。私が事業に成功し、人並みの生活が出来るようになったのも、ひとえに公学校での教育と海軍での厳しい訓練の賜物だと思っています。

生活に余裕が出来てからは、商売は息子たちに譲り、前からの念願だった桜の種苗の商いと植樹を始めました。今では隠居の身ですが、自分の植えた桜の花を愛でるのを最高の楽しみとして、静かに余生を送っております。

続